

朝山新一著

さようなら
ありがとう みんな

癌と闘った夫妻の記録

中公新書

242



朝山新一著

さようなら
ありがとう みんな
癌と闘った夫妻の記録

朝山新一 (あさやま・しんいち)

1908(明治41)年、京都に生まれる。1934年、京都大学理学部動物学科卒、専攻、発生生物学、脊椎動物の性分化。現在、大阪市立大学理学部教授。

著書 『性の現象』

『現代学生の性行動』

『性の記録』

『20世紀のセックス』

『性教育』(中公新書)

訳書 キンセイ報告『人間女性の性行動』

『動物の子ども時代』

『ワトソン生物誌』

さようなら

ありがとう みんな

中公新書 242

© 1971年

検印廃止

昭和46年 2月15日印刷

昭和46年 2月25日発行

著 者 朝 山 新 一

発行者 山 越 豊

本文印刷 三晃印刷

表紙印刷 東京プロセス

製 本 小泉製本

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋 2-1

振替東京34 電話(561)5921代

まえがき

癌はむごい病気である。犯された組織や器官がいの身体の部分は健康なのに、病む人はみるかげもなくやせおとろえ、貧血し、飢餓におそわれ、はたのみる目にも堪え難い痛みに責めさいなまれたあぐくのはてに死ぬ。医学史によると、この病気は紀元前三世紀のむかしから、死にいたる病として知られていた。ローマ時代には、癌になった身体の部分、たとえば乳房や腕を外科手術でとり除く方法が採られていたし、当時の有名な医者ガレノスは、癌は身体の中の体液のバランスがこわれて、脾臓からでる黒胆汁が多くなりすぎるとなるのだ、と考えていた。実際、癌の末期になると患者の血液の状態が悪くなり、現代の医学ではそれを〈悪液質〉とよんでいる。

癌が不治の病だと知られてから二十三世紀ものながい年月がたった。十九世紀後葉から二十世紀にかけての生物科学の急速な進歩のおかげで、ほかの病気の原因はどんどん解明されなあってゆくのに、癌だけはいまだにどうにもならない。きわめて早い時期に癌の所在をつきとめて、癌化している組織全体を完全にとり除く手術に成功しないかぎり、患者を救う道はない。そしてわが国の、この病気による死亡率は、脳出血について第二位をしめている。誰もがこの病気の惨め

さや恐ろしさを知っているのだが的確に治癒さす方法のめどがつかない。それはいったいどういうことに原因しているのだろうか。これには医学のいろいろな立場からの説明があろう。が、それとは別に、私のように発生学をやってきたものの側からみると、この病気をなおす方法を見いだすことのむつかしさがよくわかる。

われわれの身体をつくっている細胞は、神経細胞は別として、たえず死に、代りに毎日何千億という細胞が新生、増殖して、失われた細胞をおぎなっている。ところが新しく分裂してできにくる細胞のなかに、母体となった組織の細胞とちがって組織特有の性質を失い、ただむやみに増えつづけるだけの能しかない無法者ができてくることがある。それが癌化した細胞だ。増えた細胞の集団がある大きさに止って、それ以上にならなければまだよいが、そういう自律的な統合性がなく、ただ無性に増えつづける場合は集団自身の物質代謝がうまくゆかないから、集団そのものが壊疽をおこし崩壊する。そのとき放出される毒素が血液にはいつて、貧血やひどい憔悴など癌患者特有の症状をひきおこす原因になる。

癌という無法者の集団は発生した場所に癌の塊をつくるだけでなく、遠慮会釈なく隣の組織へ侵入しそこでまた増殖して大きな塊となり、付近の器官を圧迫して機能障害をひきおこさす。神経系を侵すとたえがたい痛みを生じる。また、リンパ管をつうじてひろがり、直接に他の器官に移転して、最後は全身のいたるところに癌ができる。こうして身体を維持するための重要な器官

の働きは損われ、ついには全身の働きが失われ死の転帰をとる。

癌が発生するのには、遺伝的な体質因子が関係するようだが、また、生体がおかれている環境因子に原因がある。タバコの煙にあるベンツピレンや、煙突の煤すすの中に含まれているタールのような物質（発癌物質）にたえず触れていると、その組織は癌になるし、特殊なウイルスの感染でも癌は起こる。放射線を照射したり、慢性の刺激を与えられることでも癌は発生する。組織から新生する細胞が異常な生理環境に出合うと、細胞内の働きが変わって自分に予定されている発生能力が変更され、ただ分裂するだけの能力しかもちあわさらないものになってしまう。こういう根性曲りの細胞をもとのルールを守る細胞に立ちかえらせる手段を見つかるか、正常な細胞はそのままで無法者だけを選択的にやっつけて殺してしまいう方法を見つけないかぎり、癌を治癒することはできない。その方法を発見するのがことなのだ。というのは、癌を抑制する問題は発生学の、もつとも基本的でまたむつかしい（細胞分化）の問題に属しているからだ。

われわれの身体は天文学的な数の多くの細胞から成り立っている。もとは一つの受精卵の分裂から始まるが、何回も分裂をくりかえして細胞の数がふえ、胚の特定の部域に細胞が配列する段階になると、細胞はそれぞれの部域に応じた構造と機能をもつようになる。そのことをへ未分化な細胞が分化する」とという言葉で言いあらわすが、細胞の分化はひっきり、細胞の核のなかにしまわれている多くの遺伝子のなかから、特定のものが働きたして、細胞質のなかに特定のタン

パク質をつくりだすことである。いろいろな遺伝子の働きでつくりだされた幾種類ものタンパク質が、共同して細胞の構造や形や機能を規定してゆく。ところで細胞質内に特定のタンパク質がつくられるのには、特定の化学構造をもった伝令リボ核酸（メッセンジャー RNA: mRNA）とよばれる核酸が細胞質内にできていることが先行条件である。そして特定の mRNA ができるためには、その mRNA のこまかい構造を決めてゆくデオキシリボ核酸（DNA）の働き（遺伝情報の伝達）が必要である。DNA は細胞の核にある染色体の主成分ではほとんどすべての生物に認められる遺伝物質であり、遺伝子の本体といってよい。いちがいに DNA というが、それをつくっている構成要素の四つの塩基の配列の仕方によって、その構造にはひじょうにたくさんヴァリエーションができ、それぞれの構造にもとづいてタンパク質の合成に重要な働きをする mRNA の構造が規定される。言いかえれば形質の遺伝や発現は DNA がもとになり、それに対応する mRNA がタンパク合成に関与して、特定のタンパク質がつくられることによって決められていく、と現代の生物学は考えている。

受精卵からわれわれの身体が発達してくる過程では、分裂増殖する細胞はどの細胞も同じ遺伝子組成をもっている。それが特定の質をもった細胞に分化してゆくのは、一連の遺伝子、その基体である一連の構造を異にする DNA 群のなかから、特定のものが働きたし、それが mRNA を規定し、特定のタンパク質分子をつくりあげて細胞の性質を決めるのだ。ところで、現在の遺

伝学や発生学では、遺伝子の働きだすしくみには、遺伝子とは別に遺伝子の働きを抑える作用をする抑制物質や、働きを誘発する誘導物質が関係すると考えられている。もし細胞をとりかこむ外部環境から、特定の遺伝子の働きを抑制している物質に拮抗的に働く物質が細胞内にもちこまれた場合には、遺伝子の抑止は解かれ、静止の状態にあった遺伝子は働きだすだろう。それは他の遺伝子の働きと相関して、新しい形質と機能を細胞にあたえる。もし発生の過程や、細胞が新生する過程で、正常な状態ならある段階で当然働きだすはずの誘導物質が、それに拮抗的に作用する物質がつけ加えられたことで働かなくなれば、それに対応する特定の遺伝子は働きださず、その細胞は正常な過程で展開するのちがった分化をあらわしてくるだろう。癌細胞とは、そういうしくみでその細胞に内在するほんらいの遺伝子の働きが阻害され、ただ分裂するだけの能力しかもたなくなった機能喪失の細胞だと考えられる。しかも、いったん変更された分化がそのまま固定して、子孫の代の細胞にうけつがれてゆく、そういう厄介な能なし細胞の集団が癌という悪性の腫瘍なのだ。

こういう厄介な細胞を正常な細胞にもどすには、細胞分化の原理的なしくみがもっともよくわかり、人為的に細胞分化を支配できるまでにならなければならない。現在はまだ、癌についても、細胞分化のしくみについても、基本になる事実を一つ一つ集めている段階にすぎないから、そういう事実をつなぎ合わせて一つの解答を見出すまでには、なおかなりの時日と研究を要する

だろう。しかし、ホモロサピエンス（知恵のあるヒト）といわれる人間は、将来、かならず成長や分化の原理を発見して、癌細胞の発生をコントロールする方法をみつけるにちがいない。だが、その時までには癌は情け容赦なく人の身体の中に発生し、犯された人は惨めな経過をたどって死んでゆかねばならない。今日も、明日も、多くの人が死に、その人を愛したものを悲しみにつきおとすだろう。私たち夫婦も、その仲間にはいった一組である。

私はいま、癌がどういう病気であり、なぜ療法の開発がむづかしいかを、小さい書物のまえがきとしては、すこし長すぎるスペースを費やしてしるしてきた。それはこの書物の内容が、癌との闘いに敗れて死んでいった人間の記録から成り立っているからだ。私の妻は胃の後壁に発生した癌が脾臓にまで転移し、どうにもならない末期の症状にありながら、すこしでもながく生きようとする努力をすてなかった。私もできるだけながく妻の生命をのばして、残りすくない二人の日々を、楽しく、悔いなく送りたいと思って努力した。妻の身体の苦しみを、できるだけ安らかにしてやりたいと念願した。そして過去のどの仕事にそそいだよりも大きな力をそれにそそいだ。さいわい、それぞれの専門の立場で最上をつくしてくださったすぐれたお医者さんたちに恵まれ、暖かい友人たちに助けられて、妻の生涯の終焉の時を、安らかに過ごさせてやることができた。妻が癌になったとわかってから死に至るまでの七ヵ月のあいだ、さいわい特殊な化学療法によって生命をのばすことができた。その間、妻も私も、つねの生活のときには気づかなかったお互い

の強い心のつながりと、深い理解を確かめあうことができ、健康な生活のときには思いもよらなかった生きることの歓喜を発見することができた。それは幸せなことであった。

癌になったと知ると、ほとんどの場合が死につながる病気であるために、周囲の人はあきらめて手を拱ぎ、死の近づくにまかせて待つことが多い。しかし、人の生命は一度かぎりのものである。できるだけ生命をのぼし、それがたとえどんなに短い時間であろうとも、生命を享受する必要がある。そして、普通の物理的な時間尺度では計れない、深くて広い生きる歓喜を味わう機会のあることを知るべきだ。病む人に、そのよろこびのあることを期待すべきである。そのためには、患う人がその機会に恵まれるよう周囲の人は力を尽さねばならない。

癌の治療はむづかしく、完全な療法についてわれわれはまだ知らない。しかし、患う人に与えられたのこり少い生命の意味を考えて、癌に抵抗し、あきらめずに求めれば、すくなくとも癌の無法な増殖を抑えて、病む人の苦痛をやわらげ、生命をのぼし、あらためて生きるよろこびを体験できる機会にみちびく新しい療法に出会う可能性がある。最近の生物科学のたゆみない研究成果に支えられて、癌研究の分野では、たえず効果ある療法を開発工夫する努力がつづけられているからだ。私は私の経験からそのことを、この小著を通じて伝えたい。あきらめて、癌に抵抗することを怠ってはならないと強調したい。ともすると、現代の科学技術の華麗な成果に眩惑されて、人間は自分らの力を誇るが、われわれはその倨傲を捨て、人間の幸福を確保するために、

力をそそいで埋めねばならない知識の空洞のあることに気づかねばならない。人間の生命を尊重し、悲しみを除き、よろこびを促進するために、みんなで援助し、おし進めねばならない研究分野のあるのを知らねばならない。人間の生命を破壊する目的につながる研究でなく、人の生命と生活を尊重して、みんなの幸せを促進する計画をおし進めねばならない。癌研究は、その線にそって医者や生物学者だけでなく、すべての人が重要性を認識して支持し、促進しなければならぬ、もっとも重要な人間のための課題である。

私は、妻の発病と死の前後に、ひまあるごとにメモしておいた事実によって、この書物を書いた。これは私の愛した人間の生涯の簡約された生活の歴史でもあるが、いつも暖かい心で誠実に生きた一人の女の虚構のない死の記録が、癌研究への一般の関心をうながすささやかな寄与ともなることをねがって、私はあえて、この私事にわたる内容の書物を上梓することにした。

一九七一年 二月

妻と私に暖かい援助をおしまれなかった
すべての人に感謝の心をもって

朝山新一

目次

まえがき

第一章 遅すぎた発見

四回目の手術 特効薬の追跡 斜面の家
あてのない退院 外国からの手紙

2

第二章 二人の医者

二度目の手紙 丹波篠山から 攻撃開始
薬は効いた！

41

第三章 子どもとの対話

ふるさと八倉 紺屋の小嬢 看護婦さ

73

んたち　徹夜団交　金と生命

第四章　人生の序幕

寛城子回想　戦争と離散　再会　生
命なりけり

第五章　しゃべり飽きない女

人生の幕切れ　お里がえり　死の足音

第六章　さようならありがとうみんな

人間のきずな　死後への恐怖　地上と
天上と　さようならありがとうみんな

さ
よ
う
な
ら

あ
り
が
と
う

み
ん
な

第一章 遅すぎた発見

四回目の手術

十月二十三日は終日はげしい雨がふり、肌寒く、陰うつな日であった。朝九時ごろ、妻が病院から電話をかけてきた。

「お父ちゃん、石野先生が、今日、切るといわはんね」

「昨日入院したとこやのに、そりやまた早いね。今日は水曜日で教授会がある日やが、悪い日にあたったナ。大学へゆくまえに、そっちへ寄って行こうと思つていたところや。とりあえず、いまから、そっちへゆこう」と私は言った。

「父ちゃんは来んでよろしい。隆も来んでよい。いつものとおりで、わたしは手術になれている

から心配はない。石野先生にまかしておけば大丈夫。心配せずに大学へ行ってちょうだい……」
と妻は言った。

手術には肉親の誰かが付いていなければならない。隆吉でも勤め先から呼びもどして、病院へやらなければと思ったが、妻は、心配ない、大丈夫、とくりかえし、それをことわった。手術室のそとで不安な気持ちでいる子どもの心情を思い、それを思うつらさが、手術をうける自分の気持ちより耐えがたかったのであろう。

一週間まえの十月十七日、妻は、左体側たひそでの背中に激しい痛みを感じ、それをまぎらわすために肩こりの膏薬をはってくれとたのんだ。私は、肩から背を、かなり長い時間、揉み、さすってやった。いつもなら、すぐに、もう結構、というのに、この朝はいつまでも、私の揉むにまかせた。不安な痛みがあり、さすってもらうことで、それをまぎらわせていたのだろう。痛みは次の日もつづいた。どうして背中が痛むのかといぶかり、「脾臓炎すいぞうえんになったかな……」と不安な顔をした。さとするは、昭和二十二年に二人目の息子の隆吉を生んだが、産後まもなくまえからあった卵巣のりう腫が破潰して危篤になり、開腹手術をうけた。終戦後まもないときで、新京から引揚げ、さとの故郷（松山近在の八倉）に身を寄せていた私たちは、さとの父の献身的な庇護によって、その危機を切りぬけることができた。

爆撃で破壊された松山には病院らしい病院もなく、焼け残った道後の公会堂の広間が日赤の病

室に使われていた。この列は内科、この列は外科というふうに、ベッドの列が仕分けされていたが、患者がめじろ押しに横たわり、雑然として、おおよそ病院という言葉から想像できるものはほど遠いものであった。進駐軍の車にはねられ重傷でかつぎこまれた青年が、かなり向うのほうのベッドにねていたが、たえず苦しみを訴える絶叫が広間ぜんたいにひびきわたって、他の患者の苦しみを増し、まことにむごい情景であった。

さとするはさいわい生命をとりとめたが、数年後になって、ときどき原因不明の激しい便秘と腹痛に悩まされた。日がたつにつれて、その度数と程度がはげしくなった。京都に移ってからのことだったので、私の中学時代の同窓で、内臓外科のすぐれた医者である石野琢二郎氏の診察をうけたところ、それは腸の癒着による閉塞へいそくとわかり、手術を受けた。

石野氏は二時間ちかくかけてきれいに癒着を離してくれ、これでもう心配はない、あんたの腸はきれいになった、私は芸術的に手術をした、と妻に言って安心させた。「ただし、長い年月、腸の癒着をそのままにしておくと、肝臓かんぞうや脾臓や胃のような上位の消化系の臓器に、えてして障害をひき起しやすい。それには注意しておかんとあかん」と石野氏はいった。

彼の予言どおり、昭和三十五年に妻は胆嚢炎を患った。そのときも石野氏の世話になり、胆嚢をとり除いた。胆嚢を切開すると、大きな胆石が二つ、親指の先を背中あわせにしたような格好で出てきた。石野氏はそれを膿盆にのせ、私に見せた。病室の妻は胆石はどんなだった、ときい